
守護霊ルール

夕菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護霊ルール

【Zコード】

Z7556P

【作者名】

夕菜

【あらすじ】

レイという名の守護霊のお陰で、守護霊を見る力を身につけた絢。しかしそれは、“ルール”に反することだった・・・。
そんなことになっているとは知らない絢に、一人の守護霊が声をかけてきて・・・!?

第1話「バイバイ。私の日常」

先月、絢^{アヤ}のクラスに、不思議な転校生がやつて來た。

いや、違う。変わつた転校生だ。

その人 音塚陸^{オトツカリケ}は、いつも授業中、独り言を言つている。

例えば、「少し黙つて」とか、「勉強の邪魔するな」とか。これは間違ひなく、立派な独り言だ。

もちろん、隣の席の絢は、気にならないはずがなかつた。

そして、時がたつにつれ、絢の心には、不安な気持ちが芽生えはじめた。

(急に、殴りかかつたらどうしよう……)

今のは、陸の独り言を聞くたび、びくびくする始末だ。

絢は思つた。

・・・陸は、変な幻覚を見ているに違ひない。きっとそうだ、と。

・・・でも、違つた。

* * *

「ねえ。授業中、独り言、言つてゐるよね？」
絢は、移動教室のときに思い切つて聞いてみた。
陸は絢の問いかけに立ち止まり、首をかしげる。

「は？言つてないけど」

陸は、不思議そうな表情で絢を見た。

絢は焦つた。陸はやつぱり自覚していないのだ。独り言を言つていることを。

「・・・言つてたよ！誰かと話してたみたいに、一人で、話してた！…」

絢は、思わずむきになる。

だつて、聞き間違えのはずがない。

「は？俺は、二人で話してたんだぞ」

「？」

「俺は、自分の守護靈と話してたんだよ」

絢は、一瞬固まつた。

陸は、嘘をついてる？

それはあり得ない。

彼の表情と性格からして。

陸は、忘れものの報告をいちいち先生にする、馬鹿正直なやつなのだ。そんな陸が、絢に意味なく嘘をつくはずがない。

「うそ！？・・・陸つて幽靈が見えるの？」

「見えるわけないよ。俺、靈感ないし」

「・・・」

（さつき自分で見えるつて、言つたじやん・・・）

「絢も守護靈と、たまには話すだろ」

「話せないよつ・・・つて言つか、話せるわけないし…」

「は？普通は話せるだろ？」

間違つてる。

間違つてる！

普通じやないのは・・・

「普通じやないよ！陸のほうが！今までどうやって生きてきたか知らないけど、守護靈と話せる人を、普通とは言わない！」

「・・・はー？ そうなのか？俺たちは、みんなが見えてるもんだと

思つてたよ。な～？レイ？」

陸は、何もない空間にむかって問いかけた。

「は？何で教えてくれなかつたんだよ」

「ほんとお前つてやつは・・・」

「おいおい～。話をそらすなっ」

また始ました。

陸の独り言。

いや、守護靈と話をしているらしくがこつちから見れば、立派な独り言だ。

当たり前だが、周りには多くの学校の生徒がいる。

一人で、黙々と話している陸を、一瞥しながら歯とおり過ぎていく。

(少しあは周りの田線とか考えたらどうなの・・・?)

絢はこの場に立っていることであえできなくなり、陸の腕を掴んだ。そして、走りだした。

「分かんないな。俺にも……でも、レイなら知ってるらしい。」

・

陸は、横の空間を見ながらそう言つ。

「どうやらセレニに、レイという人物がいるらしい。」

「そのレイって……どういう人……？」

「どうやら、レイの力は、すべての靈を見せることまではできないらしく。……俺も初めて知ったんだけど」

陸は相変わらず、横の空間をちょくちょく見ながら話していく。

「俺はな、レイのお蔭で守護靈を見ることができてる。レイは、守護靈の中でもレベルが高くて、偉い守護靈だから、それができるんだ。

でも、俺は守護靈が皆、それが出来ると思つていた。ほんと俺って、馬鹿だよなー！ はははははは。

それに比べ、レイは凄い奴だよ。ほんと尊敬しちまうぜ……つて、言つよつにレイに言われたんだ」「

陸はその言葉を言い終えた後、はははと楽しそうに笑つた。

「あっ……そう

絢の口からでた言葉は、溜息に近いものだった。

「残念でしたー。俺もそこまで正直に言つほど、馬鹿じやないもんね

陸は、隣にいるらしい、レイという人物と楽しそうに話している。

・・・こんなの不愉快だ。

まるで、友だちが自分の目の前で、他の誰かとケータイで楽しくおしゃべりしているときみたいに。

「ねえ……私にも見せてほしいんだけど。守護靈」

沈黙。

陸は絢の発言を聞いて、明らかに戸惑っていた。

あー……。どうしてそんなこと言つたんだろう。

無理なこと言つても、陸を困らせるだけなのに。

「わかったよ

「お前には感謝してるしな。こんな、授業中に独り言ひつてゐるような奴に、話しかけたのお前が初めてだよ。

「……」

陸は、いつも俺の相手をしているせいで、友達もろくにできなかつた。こんな陸のことを知らうとしてくれて、感謝している。そのお礼といつわけ

陸は、目を細め、絢のことをしつかりと見据えてそう言つた。

（陸じゃない……？）

絢はいつもと違う陸の雰囲気に、戸惑いを隠せなかつた。

見た目は、陸。しかし、何かが違う。

おそらく違うのは、身にまとう雰囲気だらう。

確かに陸の中には、“レイ”が入つている。

陸は、レイに体を使われている。

レイは、陸をとおして私に話しかけている。

絢は、このとき初めて、レイの存在を感じることができた。

陸は、突然、はつとして目を見開くと、横に振り向いた。

「レイー。もしかして、俺の体また勝手に使つた？ 使うときは、前

もつて知らせろつていつも言つてるだろ？」

「……それなりいけどよ。俺が不安になつちまつだろ……」

どうやら、体を使われていたことは気づいたらし。

それにしても、体を使われてるつてどんな気分なんだろ……

「絢」

「……！」

絢は、はつとして陸を見た。

陸は一ヶ口と笑つた。

「……といつわけで、“力”を分けてくれるつて

「それじゃ……私も、守護霊と話しが出来るの？」

「……うん。でも、自分の守護霊と会つことはできない」

陸は、申し訳なさそうに目を伏せた。

「え？・・・何で・・・？」

陸は、少しの沈黙の後、重々しく口を開いた。

「レイが・・・そう言つてゐる。多分、自分の守護霊と話したりするのは、大きな力を使うから、今のレイには無理なんぢゃないかな。レイ、まだ子どもだし」

「・・・そなんだ」

絢は、肩を落とした。

自分の守護霊と話しができないなんて。かなりショックだ。一番期待していたところなのに。

「それでもいい？」

陸は、黙つたままの絢に問いかけた。

「・・・」

（自分の守護霊と会えないなんてショック・・・でも、レイの姿見たいし・・・）

絢は気になつた。レイの姿が。そして、陸の見てゐる世界が。

「うん。いいよ」

絢は迷わずそう言つた。

「じゃ、そのときはまた明日」

「は？」

「明日の放課後、またここに集まつてーほり、授業始まつちゃうし。あ～。明日が楽しみだ」

陸はそう言つと、絢に背を向けて、歩きだした。

（・・・明日か・・・）

まあ、いつか。

そんなに急ぐ用でもないし。

その時、授業開始のチャイムが鳴つた。

「やばい」

絢は、前を歩いている陸を抜かして、急いで教室に向かつた。

「ただいまー」

絢は、自宅へ帰ると居間にいる母にそう言った。

「お帰り」

ソファに座つてテレビを見ている母は、肩越しに振り替えると、素っ気なくそう言つ。

そして絢は、一階へと続く階段を駆け上がつた。そして、どかっとベッドに自室に入つて、カバンを机の上に置く。そして、腰を下ろした。

今日あつたことが、いまだに信じられない。

これで、退屈な日々ともおさらばできるかも。

絢は、テレビのリモコンのスイッチをポチリと押した。

テレビが、ぼおん。という低い音をたてて喋りだす。

そう、これが絢の日常だ。暇なときは、テレビがお友だち。

絢は、一人っこ。

ペットも飼つていない。

両親は、口数が少ない。

(兄弟がいたらしいのになあ・・・)

今までに、何度も思つたことか。

でも、絢が幼いときは、仲いい人がほとんど毎日、家にいた気がする。

顔は覚えてないが、よくその人と一緒にこたつに入つてテレビを見ていた。

多分。

その人が、家にいないときは、淋しくていつもぐずついていたのを覚えている。

母にそのことを話したら、どうやらその人は、近所に住むお姉さん

らしい。

しかし、その人は絢が5歳になるときには、遠くに引っ越してしまったそうだ。

（あのときはよかつたなー···）

しかし、明日からは新しい日常が待っているのだ。
バイバイ。今までの日常。これからは、新しい日常と付き合っていくことにするよ。

新しい日常は、絶対に私を退屈になんてさせないんだから。
私は後悔しないよ。

絶対に
···。

そして次の日。

絢は、放課後になると同時に屋上に向かった。

「きたきた」

「···」

既に屋上には、陸の姿があった。

絢は、陸のほうに歩みよると、言つた。

「陸···もう来てたんだ」

「もちろん。俺もこの時が楽しみだつたからな!」

「そりなんだー。陸もか!」

陸は、嬉しそうに頷くと何もない空間にむかつて言つた。

「レイ。早速、やつてもらつてもいいか?」

「···分かつたつて···」

「···」

陸の独り言が終わった途端、絢の田の前に電気のよつなものが走った。絢は驚いて、思わず田をつぶる。

しばらくした後、絢は恐る恐る、田を開いた。

「・・・」

田の前には、ニコニコ笑っている陸の姿があった。

「ピックリした？ “力”を入れるとき、摩擦が生じて、静電気が発生するんだよ。

俺はその時、かなりびびって尻餅ついたんだよなー。まつ、今ではいい思い出だけど

「・・・」

(そんなことはどうでもよくて・・・)

絢は、キョロキョロと辺りを見渡した。

自分は本当に、守護霊が見えるようになつたのだろうか。

「・・・・・」

絢は、悲鳴を上げそつになつた。

突然、田の前に小学生ぐらいの男の子が現れたからだ。

「初めましてだな。絢」

男の子はにやーと笑つた。

「もしかして・・・レイー？」

「もしかしなくても、そうだっ」

男の子 レイは、大きなグレーの瞳で、絢のことを見ている。

「どうだ？俺の姿は？」

「どうつて・・・」

絢がまず驚いたことは、色がついている、ということだ。

絢にとっての幽霊は、色がついてなくて、透け透けといふイメージがある。

・・・しかし、そのことはすべて間違いといつわけではなかつた。レイに、色はついているが、透け透けだつた。

明るい栗色の髪の向こう側にも、着ている暖かそうな洋服の向こう側にも、屋上の床が見えた。

「透け透けだね・・・」

「なー？」

レイは、明らかにショックを受けた顔をした。

・・・しまつた。

「」「は、かつこいいーとかいくてるーと言つべきだつたか。

「レイ、そんな顔するなよ。幽靈の第一印象なんてそんなもんだよ
陸はレイのことを慰めるよう」、そう言つた。

レイは、絢から田線を外し、陸を見た。

「陸にはそんなこと言われたくないな。

陸、お前は初めて俺の姿を見たとき、何て言つたか覚えているか?
暑そう。だぞ!~」これは明らかに、幽靈に対する第一印象ではない
。」

「は?そりゃそうだる。だつてその時、夏の真っ最中なのに、レイ、
冬服着てるし・・・」

「俺は、ロシア出身の守護霊だ。ロシアは、日本と比べものになら
ないぐらこ・・・」

「あの・・・レイ君」

絢がレイに声をかけると、レイは陸との会話をやめ、絢のことを見
る。

「ひとまず・・・ありがとう。力を分けてくれて」

レイは、絢の言葉を聞くと満足そうに微笑んだ。

絢は思つた。

これから自分には、非日常的な生活が待つていると。

第2話「罪の証明」

「ねえ、レイ君。誰にも守護霊ついているの？」

授業中、絢は出来るだけ小声で、隣に浮いているレイに問いかけた（ちなみに陸は、授業中にも関わらず、机の上で爆睡している）。レイは、ふわりと窓のさんに腰かけると言った。

「もちろんだ。でも、守護霊の本来の姿は“魂”だけだ。

俺みたく、生きていた頃の姿になるのは、会話をするとさだけだな。だから普通は、守護霊の姿は見えないぞ。

皆、好んでは人間の姿にならないからな」

「・・・・・ そうなんだ」

クラスの皆の守護霊を見たいって思つてたのに。

・・・これではつまらない。

「・・・・ねえ、誰かに話しかけてみてよーこれじゃつまらなによ・・・

・

「やだね。余計なことはしたくなー」

レイは、口をへの字に曲げた。

「え～・・・

「でもそのうち、話すことになるよ」

レイは、そう言つと明後日のまつを向いてしまった。

「そのうちつて・・・?」

絢は眉を寄せた。

レイは、絢の問いかけを気にする様子もなく、今度は陸の机にふわりと腰かけた。

絢は、彼の表情からして、これ以上の質問をしても無駄のようを感じた。

「・・・」

絢は、浅くため息を吐いた。

レイは、何かを隠している。力を分けてくれたからといって、全てを認めてくれたわけではないのだろうか。

「絢

「！」

突然、前から声をかけられた。

見ると、そこには絢の友達 朋歌^{トモカ}の顔があった。

朋歌は、目を細めて絢をみた。

「さつき何か言つてなかつた？」

「えー・・・言つてないよ！」

絢は、とつさにそう言つた。

いつの間にか、授業は終わつていて、教室は騒がしい。

絢の、前の席の朋歌は、少しの沈黙の後、真顔で言つた。

「誰かと話しているように聞こえたけど・・・寝言？それとも、幽靈と話してたりして」

「はは。そんなわけないよー」

絢は、曖昧に笑つた。

朋歌は、そんな絢を見て微笑んだだけだった。

（気を付けないと・・・）

そう、守護霊と話すときは周りから見ればりっぱな独り言になってしまふのだ。

まだ陸の机に座つてこちらを見ているレイのこととは気にしてないようだ。

「絢は、彼の表情からして、これ以上の質問をしても無駄のよう感じた。

「・・・」

「レイ、絢に本当のことと嘘わなくていいのか？」

陸は、下校中、隣を歩いているレイに問いかけた。

「そんなこと、陸が気にすることじゃなー」

隣に浮かんでいるレイは、前を見たまま早口でしゃべった。

「普通は気になるだろー。絢の守護霊、絢に恋ひことを抱いてたんだろ？・・・何でだよ？」

「・・・あいつはあいつなりの事情があるだよ

レイは、ため息混じりにそう言った。

「その事情つて、一体何だよ？」

「知らないね

「はあーー？」

「・・・自分で確かめれば済むことだ

「・・・」

レイは、ふんわりと鼻をならすと、その場で姿をかき消してしまった。

「何だよ。あこつか」

レイは、陸が今まで一度も、他の守護霊と話したことなどを知っているはずなのに。

・・・もう、陸はレイ以外の守護霊と話したことがない。
いや、話したくなー。

自分のことによく思つている守護霊なんて、きっと他にいない。
むしろ、白い目で見られているだらう。

だって自分たちは、”ルール”を破ったのだから。

* * *

「絢ちゃん！」

「！」

家路をいそぐ絢に、声を掛けてきた1人の女性・・・いや、正確に言うと、1人の守護霊がいた。

その守護霊は、絢と同じぐらいの年齢（見た目は）に見える。

彼女は、ニッコリと笑った。

ウェーブのかかった長い金髪に、青い瞳。そして、白を基調とした可愛らしい服。

まるで、その姿はどこかの國のお姫様だ。

「私たちのことが、本当に見えるんだ。すごいねー」

「・・・その服、かわいいですね！」

絢は、内心かなり驚いていた。だつてこうも早く、他の守護霊に話し掛けられるなんて、思っていなかつたから。

それでも絢は、何とかそう言つことが出来た。

「ありがとう。・・・私さー、ずっと前から人間の女の子と話してみたいと思ってたの。

よかつた 絢ちゃんが、私たちのこと見えるようになつて

「・・・」

絢は、彼女の言葉が嬉しくて微笑んだ。

「私、リナっていうんだ。よろしくね、絢ちゃん。これからたくさんおしゃべりしようねー。あつ、ちなみに、タメ語でいいからつ

「あ・・・うん！」

彼女 リナは、絢の言葉に嬉しそうに頷くと、先頭をきつて歩きだした。

「近くの公園で話そ！立ちっぱなしじゃ大変でしょ？」

「そうだね」

絢は、リナの隣を歩きだした。

絢は思った。

人間以外の友達ができることは、少なくとも、悪いことではない

と。

「ねえ、今の時代って何が流行ってるの？」

公園に向かう途中、リナにそんなことを聞かれた。

どうやら、リナは生きてるときは、流行の最先端をいく美少女だつたらしい。あくまでも、これは絢の推測だが。

しかし、絢は流行の最先端をいつている自信が全くないので、こう言つことにした。

「それじゃ、街のほう行く？ そしたら、色々分かりそうだし」

「あっ・・・えっと、大丈夫だよつ。ほら、街の方に行くと、人いっぱいいるでしょ。そしたら、絢ちゃんと話せなくなっちゃうしね」

「あ、だよね」

リナはちゃんと分かつてくれている。

絢は少しばかりほつとした。

と、ある疑問が絢の頭に浮かんだ。

(・・・そういうえば、リナちゃんって誰の守護霊なんだろ？)

もしかしたら、絢の知っている人かもしれない。

「ねえ、リナち・・・」

その時、リナが人差し指を口元にあてた。

絢は言いかけた言葉を何とか飲み込む。

すると、リナは立ち止まり後ろを指差した。

絢もつられて立ち止ると、後ろを振り返った。

「あ・・・朋歌だ」

少し離れたところに朋歌の姿が見えた。

こちらに向かって、歩いて来ている。

朋歌もこちらに気が付いたようで、絢にむかって小さく手を振ってくれた。

絢も手を振り返す。

「あれ、絢つて家こいつちじやないよね？」

朋歌は、絢の隣で歩みを止めると言つた。

「うん、違うよ」

リナは絢がそう言つた同時に、絢の隣から離れると、ふわりと朋歌の隣に移動した。

「私は、朋歌ちゃんの守護霊なの」

リナは、微笑んでそう言つたと、煙のよつて姿を消してしまった。

「あ・・・」

「そうなのか。」

リナは、朋歌の守護霊だったのか。

それなら、リナともいつでも会つことができるかも。

「何？ なんがあるの？」

朋歌は、後ろを気にするよつて肩越しに振り返る。

絢は、ドキリとしてとつせに言つた。

「あ・・・・何か、野良犬がいた感じが・・・」

「・・・・」

「もしかして、幽霊見えてたりして」

朋歌は、にやつと笑う。

「ははっ。そんなわけないよー」

朋歌は絢の言葉を聞いて、くすくすと笑つと言つた。

「ほんとに見えたら面白いのに

「だよねー」

絢は、あははと笑つた。

「そういうえば、絢つてどうしてここにいるの？ 家、いりすじじゃないんでしょ」

「・・・・」

(やついえば、リナちゃんと公園に行つて話してたんだよね・・・)

「どうしよ。

何て言えばいいんだろ。

・・・一人で、公園に行くつて言つたら、余計につっこまれそう
だし・・・

「えつ・・・と・・・えーと・・・」

「じゃ、私の家来る？私の家、すぐそこだし」

「あつ・・・うん！」

絢は、目をまるくした。

今までに、朋歌から誘いをうけたことがなかつたからだ。
いつも絢が、遊びに誘うと暗黙の了解で決められていると思つて
いた。

それなのに、朋歌から誘つてくれるなんて、新鮮で少しだけ嬉しい
感じがした。

「せつかくここまで来たんだし。たまにはいいでしょ」

朋歌はそういうと歩きだした。

絢も、朋歌の隣を歩く。

(嬉しいな・・・)

朋歌の家に遊びに行くなんて、かなり久々だ。
絢の心は踊っていた。

朋歌の部屋へ入った。

彼女の部屋は、とても綺麗に片付いていた。

茶や白を基調としたものが多く、絢の部屋と比べ大人っぽく落ちつ
いた雰囲気の部屋だ。

「適当に座つてて。何か持つてくるから

「ありがとー」

絢は、朋歌が部屋から出でていくと、丸いテーブルの前に置いてあつ
た座布団に腰を下ろした。

* * *

「あのや、レイ」

陸は、浴室に入るとすぐ、ベッドに倒れこんでそう言った。
しかし、返事はない。

陸は、もう一度言つた。

「あれ・・・レイ・・・・」

陸は、ベッドから素早く起き上ると怒鳴つた。

「レイ・・・」

「何だよ・・・」

レイが陸の目の前に、スッと姿をあらわした。

レイは、明らかに不愉快な表情を浮かべている。

「あまりちょくちょく、話しかけるな。俺だって暇じゃないんだからなーそのくらい分かれ

「分かつた、分かつた」

陸は、ため息混じりにそう言つた。

レイは、ふわりと陸の隣に移動するとそこに腰掛け、陸を見た。

「で、何なんだ。用件は?」

「・・・俺つて、他の守護霊から、よく思われてないよな?」

「・・・そうだな」

レイは、申し訳なさをうつて目線を下に移す。

「それは絢も、同じ何だろ」

「・・・そういうことになるな」

「俺はルールを破つてることを知つていて。だからそれなりに、気付けることができる。

でも、絢は知らない。これってやばくないか?」

レイは、うーんと唸るとベッドに、倒れた。

レイの体越しに、見慣れた布団カバーの模様が見える。

「やばいと言つたら、やばいな。でも、”本当のこと”を知つても、何もいいことなんてない。そうだろ？」

「まあ・・・そりゃあな

陸も、レイに続いてベッドに仰向けに倒れた。

そして、言葉を続ける。

「でも、いいことがないにしても、気を付けることはできる」

レイは、陸の言葉を聞くと、低い声で言つた。

「氣を付けるといつても、それは絢の重荷しかならない。・・・時期をみて話すことにする。そんなに早くは、あいつらも見つけられないだろ?だからな」

陸は、そのままベッドの上でゴロゴロといぶがる。

「あ〜・・・。俺は心配だー・・・」

「おいー!こっちまで転がつてくるなつ。邪魔だ!」

「レイには関係ないだろー。靈体なんだしねー」

そう、まだ時間はある。

絢が、ルールを破つたことを、あいつらに気付かれるまでは。

陸は、そのことを心から願つた。

しばらくたつと、朋歌が、紅茶とお菓子をおぼんに乗せて、持つてくれた。

朋歌は、それをテーブルの上におくと、絢の向かい側に腰を下ろす。

「朋歌の家に来たのって、ほんとに久しぶりだよねー」
「確かにそうかもね」

そんな感じで会話は始まった。

色々な話に、花を咲かせたり、昔に撮った写真を見つけて、盛り上がりもした。

そして、気が付くと時計の針は、午後7時を示すとしているところだった。

「もうそろそろ帰らないと……」

絢は、控えめに言った。

朋歌は、絢とは対象的に、にっこりと笑う。

「まだ大丈夫でしょ。どうせなら、今日、泊まつてけば？私の親、今日は仕事で帰つてこれないんだって」

どうやら、朋歌はまだまだ元気らしい。

普通だつたら絶対に、自分からそのようなことは、言わない。「あっ……でも、今日はいいや。ほら、着替えとか持ってきてないし」

実を言うと、今日はお泊まりをする気分ではなかつた。

全然、そんなこと考えてなかつたし。それに、今日は疲れてしまつたので、早く家に帰つて休みたかった。

「……だよね。急に決めたことだしね

「……また誘つてね」

「……ん」

絢は、顔をしかめた。

(私……何かまずいこと言つたのかな……)

今の朋歌は、明らかに落ちこんだ顔をしている。

朋歌は、前からあまり思つたことを感情にださない友だちだ。そのことは、長年の付き合いの絢がよく知つている。

「……どうしたんだろう？」

「『めんね……。もう帰らなくちゃ……』

絢は、カバンを手にとると立ち上がつた。

「うん。外まで見送るから」

朋歌も、そう言いながら立ち上がる。

「ありがと」

「大丈夫、大丈夫」

絢は、朋歌の部屋から出ようとした。

とその時、後ろから手首を力強くつかまれた。

「！」

後ろを振り向くと、そこには、じゅうらを睨みつけている朋歌の顔があつた。

「絢、やつぱり泊まつていきなよ」

「！・・・」

絢は、ドキリとした。

こんな朋歌の顔、今まで一度も見たことない。

絢は、恐る恐る口を開いた。

「朋歌・・・何でそんなに怒つてるの・・・？」

朋歌は、表情を崩さずにそれに答えた。

「何でつて・・・ 絢ちゃんが、ルールを破つたからだよ

「・・・ルールつて何？」

絢は、つかまれた手首を丁寧にほどいて思つたが、朋歌はなかなか手を離してくれない。

朋歌は、より一層手に力を込めた。

「守護霊ルール。私たちの、絶対に守るべきもの」

「！・・・」

絢は、“守護霊”という言葉を聞いて、ドキリとした。

(もしかして・・・リナちゃん？)

そう、リナは絢のことを“絢ちゃん”と呼んでいた。
そして、いつもと違う朋歌の雰囲気。

絢は、思った。

朋歌は、リナに体を使われているのだと。

絢はそのことを確信すると、口を開いた。

「リナちゃん！・・・一体どうしたの！？私・・・そんなルールなんて、しらないよ・・・」

朋歌の姿をしたリナは、クスクスと笑った。

そして、朋歌の声を使って言った。

「知らないことは罪。知らないからと書いて、全てが許される」とはないの。」
「これを見て」

朋歌・・・いや、リナが、空いてる方の手を前に出すと、その中に紙が一枚現れた。

リナは、それを絢の手の前まで持つてくる。
その紙には、こう書かれてあった。

【第8条】

地球上に住む一切の人間は、守護霊の存在を確認してはならない。

絢は、眉を寄せた。

(何これ・・・?)

「これは、守護霊ルールの文なの。書を持つてくるわけにはいかないから、『ペリーなんだけどね』
リナがそう言つと、その紙は、音もなく手の中で消えた。
「・・・お願い、離して」

絢は、リナの手から逃れるため、彼女の手を引き離そうとする。
「駄目！絢ちゃんには、私たちの住む世界『冥界』に、一緒に来てもらう。そして、そこでそれなりの罰を受けてもらひ」

「冥界って・・・」

絢の頭の中に、暗闇の中、地面にドクロが転がっているような景色が浮かんだ。

こんなのがり得ない！――

どうして私が、こんなめに合わないといけないの・・・？

絢は、早鐘のようになつた自分の心臓を落ち着かせる」とも出来ずについた。

「やだ！――離して！」

「「」めんね。絢ちゃん」

すると、リナの手の中に、手錠のようなものが現れた。

(何あれ・・・? 手錠!?)

いや、あれは間違いなく手錠だ。

よく漫画や、テレビドラマのなかで見る。

リナはその手錠を、握んでいる絢の手首まで持つてきた。

「ルールを破った者は、そのことを証明するために、この手錠をかけるの」

リナの冷たい声が聞こえる。

「・・・・・」

心臓の鼓動は、ますます激しくなる。

「やめてよー朋歌ー!!」

絢が、そう叫んだ途端、朋歌の体から、リナが弾き出されたのをじとじでた。

「きやつ」

リナは、顔を歪ませて「ひひひ」と、部屋の隅の方まで勢いよくとばされた。

絢はその光景に目を丸くする。

(朋歌の体から、弾き出されたー?)

「「」めんねー絢」

「ー」

前を見ると、朋歌が不安げな表情でこちらを見ていた。

「絢、わつき、やめてよって言つたよね!? 私、嫌がるといつないとしたみたいで・・・」「めんね。絢!」

「あつ・・・だつ大丈夫!」

朋歌にとつさにそう言つた後、絢は、ドキリとした。

朋歌の背後に、リナが突然現れたからだ。

「絢ちゃん、お願ひだから朋歌ちゃんの体、使わせてよ。もうしないと、絢ちゃんの体に触れることさえできないの。

絢ちゃんのこと捕まえないと、私が怒られちゃう

リナは、申し訳なさそうに絢を見る。

一方、絢はそんなことは、聞いてなかつた。

・・・・早く逃げないと。

「朋歌、じゃ、また明日ね！」

「え？ 絢？」

絢は、朋歌の困惑した表情も気にしないで、朋歌に背を向けた。そして、走りだす。

自分でも信じられないスピードで、階段をかけ降りた。

「絢ちゃん！ 待つてよ」

二階の方から、リナ（朋歌）の声が聞こえた。

リナちゃん、そんなこと言つても意味ないよ！

待つんだつたら、最初から逃げてないし！ -

絢は、心の片隅でそんなことを思いながら、玄関に続く廊下を走った。

「！」

その時、後ろから、鈍い音が聞こえた。

「いつたー・・・」

「どうやら、リナが階段で足を滑らせたらしい。」

「朋歌！ 大丈夫！？」

（じゃなくて、リナちゃんなんだよ！）

絢は、朋歌の苦痛な表情に心が痛んだが、我慢した。だってあの人は、リナだ。駆け寄つたら最後、待つてましたとばかりに捕まってしまうだろう。

絢は、急いで玄関で靴を履くと、ドアノブに手を掛けた。

ガチャガチャ・・・

（開いてないしつ・・・）

鍵がかかつる。

でも落ち着け。

内側からなら、開けられるはずだ。

絢は、必死の思いでドアに付いてる鍵を探す。

(あつた!!)

絢は、鍵を回して、勢いよくドアを開けた。

ガシャ!!

「！」

(チエーンがつ・・・)

ドアチエーンがかかつたままだつた。

心臓が、一気に高鳴る。

(早くしないとつ・・・)

絢は、すっかり暗くなってしまった玄関で、チエーンに素早く手を掛けた。

(やばい、やばいつ・・・)

「追いついたつ!!」

「！」

背後から、首に腕を回された。

朋歌の着ている服が、肌に触れる。

「お願いだから、もう逃げないで」

リナの声が耳元で聞こえた。

「つ・・・」

リナの手が、痛いほどの力で絢の手首を掴む。

「痛つ・・・」

絢は、表情を歪ませた。

とその時、突然、激しい目眩に襲われた。

視界がぼやけて、目の前が真っ暗になる・・・・・

「…」「

気がつくと絢は、自宅の前に立っていた。

(は？・・・・何でこんなところにいるの！？)

自宅の玄関には、明かりがついており、今絢の立っている場所も、ほどほどに明るい。

「絢ー」

「！」

かけられた声に振り向くと、そこには陸の姿があった。

「陸・・・・」

「よかつた。間に合つて」

陸は、絢に笑いかける。

しかし絢は、笑いを返している余裕はなかった。

「私・・・どうしてこんなところにいるの？さつきまでは、朋歌の家にいたのに」

陸は、絢の言葉を聞いて困ったような笑みを浮かべた。

「それはな・・・・」

「俺が、絢の体を使わせてもらつたからだ」

その声とほぼ同時に、陸の頭の上にレイが姿を現した。レイは、当たり前のようすに陸の頭に腰をおろしている。陸は、腕組みをすると言った。

「絢じや、リナから逃げられなかつただろ？もう少し早く、居場所が分かつてたら、余裕で助けられたんだけどな」

「・・・・・

(レイが助けてくれたんだ・・・・)

体を使われるつてどんな感じだるつて思つていたけれど、以外とあつけないもんだった。

でも、あの時の眩はどうも嫌だった。あの時に、レイが体に入

つたのだろう。

(・・・でもどうして・・・)

レイが助けてくれたんだろう。

普通、自分をピンチから助けてくれるのは、自分の守護霊ではないだろうか。

「おい。レイ！俺の頭にのんな！」

レイは、陸の言葉を聞くと、「はいはい」と黙って隣の壇の上に飛び移る。

そして、そこに腰を下ろした。

「ねえ・・・・どうして私の守護霊は、私のことを助けてくれなかつたの？・・・・守護霊は、守ってくれるもんじゃないの・・・？」

「！・・・・」

絢の言葉に、陸とレイは、目を大きく見開いて固まつた。

そして、重い空気が漂う。

「・・・いいか。絢。守護霊をそのようなものと思つては駄目だ」

「・・・・・？」

レイは、しっかりと絢の目を見た。

レイの表情には、少しばかりか怒りが混じつているように見える。「そういう考え方の人間たちが、多かつたため、守護霊たちはルールを作つた」

「・・・・・」

(ルール・・・・？リナちゃんが言つてた・・・)

「昔の人間は皆、守護霊が見えていた。しかし、それが故に人間たちは、守護霊を頼りきつていた。

そして、ついには守護霊と人間の間でいざいざが起こり、守護霊は人間たちの前から姿を消した。

正確には、“人間には見えなくした”んだがな

「・・・・！」

昔の人は、皆、守護霊が見えてた・・・?

それに、守護霊のルールつて・・・?

絢は、陸の表情を伺つた。陸は、絢と違ひ驚いていいる様子はないようだ。

「どうやら、陸はそのことについて知つてたらしい。」

「守護靈は、見守るが原則だ・・・」

『絢、今すぐここから離れて』

「！」

誰かの声が、頭の中で響いた。

絢は、心臓が飛び出るほどに驚いた。

陸とレイは、突然表情を変えた絢を見て、何事かといひながらを見ている。

「え！？ 何・・・？ 声が・・・」

それに何だらう。

さつきの声。

どこかで聞いたような声。懐かしい声。

「声がどうしたんだ？」

陸は、顔をしかめる。

『絢。早くあの一人から離れて！』

(… 一体、何！？)

あの二人つて、陸とレイのことだよね？

その二人が何か危険なの？？

「すみれ。お前は黙つていろ」

突然、レイが低い声で唸つた。

レイは刺すような目つきで、一いちらを睨んでいる。

「すみれ・・・？」

絢は、その名前に聞き覚えがあつた。

そう、絢が5歳になるときまでよく家にいた、お姉さんの名前だ。

「その声は、絢の守護靈の声だ。そして、彼女は絢が5歳になつたときに、いつちの世界に来ている」

レイが、そう言つた瞬間その姿は、すつと空気に溶けるように消えた。

「・・・え！？」

よく意味が分からない。

すみれお姉ちゃんが、私の守護霊？

「絢。俺が、余計なことをしなければルールを破らなくてすんだのにな。でも、絢は、自分からそのことを望んだのだ」

目の前の陸が、レイと同じように低い声でそう言つ。

陸、いや・・・レイがこちらを睨んだ。

・・・陸は、レイに体を使われているんだ。

一気に心臓の鼓動が、高鳴る。

「絢。俺は、お前にルールを破つてもらいたくて“力”を『与えた』

陸の声のレイが、何よりも冷たい声でそう言つた。

『絢！早く逃げて！』

「・・・！」

絢は、すみれの声に押されて、レイに素早く背を向けた。

「！」

走り出した瞬間、誰かにぶつかつた。

その人は・・・レイだった。

「俺の仕事のためだ。我慢してくれ」

その声とほぼ同時に、レイの片方の手が、絢の首を力強く掴んだ。

「！」

苦しい。

陸に首をしめられるなんて・・・。

悲しいよ。

陸は、本当はこんなことをする人じゃないのに。絢は、抵抗しようと、レイの手をぎゅっと掴む。とその瞬間、その手にレイが素早く手錠をかけた。

「！」

それとほぼ同時に、手首に切り裂かれるような痛みがはしる。

「痛つ・・・」

絢は、その手をかばうよつて、地面にしつづけてしまった。

「はずしてよっ！……痛い！……」

絢は無我夢中で叫んだ。

自分は何かした？全く悪いことなんてしてないよ…？

なのになにどうして…？

「助けて！すみれお姉ちゃん！！」

絢は知らぬ間にそう言つっていた。

確かにそこそこねむはずの、すみれのこと信じて。

そして、絢は意識を手放した。

第3話「見えなくても、そこはあるの？」

「すみれお姉ちゃん。どこ行くの？」

幼い絢は、玄関先に立っている学生服のすみれの姿を見て、彼女にそう問い合わせた。

「私、遠くの町に引っ越しことになつたんだ」「すみれは、曖昧に微笑んだ。

「・・・」

絢は、いつも疑問だった。

何で、すみれはいつも笑っているのだろう。

絢はすみれの泣いている姿を一回だけ見たことがある。しかしすみれはその時も笑っていたのだ。

絢が、涙を流しているすみれを心配して彼女に駆け寄ると、「何でもないよ」と言つてすみれは笑つたのだ。

確かに、その頬は涙でぬれているのに。

「なんで、すみれお姉ちゃんはいつも笑ってるの？」

絢は玄関先に立つすみれに、そう質問する。

やつぱりすみれは、それに微笑みながら答えた。

「・・・私ね。笑顔でいると安心できるんだ」

「・・・・

「絢。私が、家に来なくなつてもぐずつちやいけないよ。・・・お

友達と仲良くするんだよ」

「うん」

絢はすみれのことを見上げる。

すみれは、泣いていた。

・・・でも、笑っていた。

すみれは絢に背を向けて、家からゆっくりと出て行った。

そして、その日を最後にすみれは家に来なくなってしまった。

* * *

絢は、ゆっくりと目を開いた。
冷たいコンクリートの感覚が、体全に伝わった。
ゆっくりと体を起こす。

(ここは・・・どうだろ?..)

あたりは薄暗い。

しかし、これだけは分かった。
自分は、牢屋のなかにいる。
目の前には、鉄格子。

しかし、手錠はかかっていなかつた。まだ、微かに痛みの残る両手首を見ると、そこには手首を囲むようにして一本の赤い線の痕があつた。

それは、まさに手錠をかけられた痕のようを感じた。

「絢

「!

突然かけられた声に驚いて、後ろに振り返ると、そこには陸の姿があつた。

陸は、牢屋の端にあぐらをかけて座っていた。
どうやら、陸も絢と同じ状況にあるらしく。

絢は、急いで陸の隣に駆け寄るとセイに腰をおろした。

「陸・・・いつたいここはどこなの？」

「多分ここは・・・冥界だ」

陸の声は、以外にも落ち着き払っていた。

絢は最悪の答えに大きく目を見開く。

まさか・・・本当に冥界、にいくことになってしまってしまって。

「うそ・・・。一体私たちどうなつちやうのー?」

絢の困惑した声だけが、静かすぎる牢屋に響き渡る。

陸は絢を一瞥すると、申し訳なさそうにその目を伏せた。

「めんな。本当は、俺だけがこうなるはずだつたんだ。・・・レイは、初めは、俺だけが狙いだつたんだよ」

「・・・・・」

「それに、こうなること俺は前から知つてたんだ。でも、俺は知らないふりをしてた。まさか絢まで、こうなるとは思わなかつた」

陸は絢の顔は見ていなかつた。

ただ、自分の足元ばかりを見つめている。

絢は、陸の言葉に耳を疑つた。

陸は、知つてたんだこうなることを。

「それじゃ、こうなる前にどうして何もしなかつたのつ・・・!?」

絢には、怒りに似た感情が生まれていた。

陸は、レイに裏切られること知つていたのに、何もしなかつた。

絢にとつては、それが信じられないことだった。

「レイは俺にとって大切な存在だつた。俺・・・こう見えて、人と会話することが苦手だつたんだ。

でも、それを変えてくれたのはレイだつた。俺・・・レイのお陰で、笑うことができるようになつたんだよ

「・・・・・」

陸の表情は絢とは違い、穏やかだつた。

そんな陸の言葉と表情を田の井たりにして、絢の心がズキリと痛む。

・・・陸はどこか抜けているとこころがあるけれど、さつと他人を傷つけることができない人なんだ。

いくら自分が傷つけられようと、他人を傷つけることは絶対にしない。

「ごめん。絢」

「・・・謝らないでよ・・・。陸が悪いわけじゃない・・・し」

「・・・・・」

その後、重々しい空気が一人を包んだ。

一体、自分たちはこれからどうなってしまうんだろう。

目の前にある鉄格子が、最悪の展開を自然と予測させる。

両手首の赤い痕が、消えない限りきっとここから逃げることはできぬ。

絢はなんとなくそう感じた。

「！」

ふと、陸の手首を見ると、そこにも絢と同じ赤い痕があるのが分かつた。

絢は無意識のうちに口を開く。

「陸・・・。その痕・・・」

「・・・これ？」

陸は、それを絢に見せてきた。

絢は、黙つて頷く。

「それって・・・手錠をかけられた・・・」

「多分な。俺もルールを破った。

だから、きっとレイにかけられたんだよ・・・

「・・・・・」

「私たちこれからどうなっちゃうの？」

陸は、絢の言葉に俯き、ぎゅっとじぶしを握る。

「分らない・・・

「・・・・・」

絢は、泣きたくなつた。

不安で不安で胸が押しつぶされそつ。

「絢」

陸じやない、誰かが自分の名を呼んだ。

「すみれお姉ちゃん！？」

確かに、絢の前には懐かしいすみれの姿があつた。
あの時と同じ学生服に身を包んで、すみれは絢の目の前に立つて
いる。

絢は思わず立ち上がつた。

「ごめんね。本当はこんな形で会いつもりはなかつたのに」
すみれは微笑んだ。
とても悲しそうに。

「つ・・・」

絢は、すみれの微笑みに懐かしさを覚えた。
だつて、まつたくあの時と変わつていなかつた。

「守護霊に会えて・・・よかつたな」

絢の後ろに座つたままの陸が、そう呟くのが聞こえた。
「私は、絢の住む世界から離れてから、ずっと絢と一緒にいたの。
絢が、こんなかわいらしい女の子に育つてくれたなんて、ほんと
時の流れはあつと言つ間ね」

「つ・・・！」

絢は、このとき真実を知つた。

すみれの命は、絢の知らない間に消えてそして今、ここにあると
いうことを。

「すみれお姉ちゃん・・・私・・・」

胸がくるしい。

そして悲しいよ。

自分がなにも知らなかつたなんて。

すると、すみれの半分透けた掌が、絢の頭をそつとなでた。

「いいの。いいの。だつて、今こうして一緒にいることができるじ
やない。過去のことなんて気にしないで？」

「・・・・」

絢は、すみれの言葉に頷くことが出来なかつた。

悲しくて、とても悲しくて。でも、嬉しくて、安心した。

それでも、すみれは相変わらず微笑んでいる。

今の絢には、理解できていた。

すみれの微笑みは、悲しみをそして、苦しみを誤魔化すためにあるといふことを。

「絢。陸。私の話をよく聞いて？」

すみれは、絢の頭からゆっくりと手を離すとじっかりとした口調でそう言った。

すみれは、真剣なまなざしを絢、そして絢の後ろの陸へと送る。

「何・・・？」

絢は雰囲気の変わつたすみれの言葉に、自分の心臓が高鳴るのを感じた。

「二人がもとの世界に帰るには、『守護霊ルール』が書かれてある本に、新たな決まりを加える必要があるの。

“守護霊以外の者は、冥界においてはいけない”って

「え・・・」

絢は、すみれの予想外の言葉に戸惑つた。

新しいルールを書き加えるだけで、自分たちはもとの世界に帰ることができるというのだろうか。

(本当にそんなことって・・・できるの・・・)

すみれは、絢の疑問を察したらしく、口を開いた。

「ここは冥界。人間界の基準とはいろいろ違うところがある。そのことを理解して？」

すると、後ろに座つている陸が立ち上がる気配がした。

陸は絢の隣まで歩みよると、低い声で言つた。

「守護霊ルールに新しい“ルール”を加えることにより、俺たちはもとの世界に強制的に帰らなくてはいけなくなる。・・・つまり、帰れるつてことだろ？」

すみれは、陸の言葉に微笑んで頷いた。

「そういうことよ」

「……でも、その守護霊ルールが書かれてある本は、どこにあるの？」

絢の声には、明かに不安が入り混じっている。

「・・・」

少しの沈黙の後、すみれが眉間にしわを寄せ、小声で言った。

「ここにあるの」

「一」

すると、すみれの手の中に青色の分厚い本が音もなく現れた。その表紙には、金色で変わった文字が書かれてある。

「早く見つからないうちに書いちやつて。本当は、勝手に持ち出すことは禁止されてるの」

「・・・」

すみれは、その本を絢に差し出す。

絢は、戸惑いながらもその本をすみれからしっかりと受け取った。その本は、ずつしりと重い。

絢はそのことが、より一層、この本が大切だということを表しているように感じた。

「すみれ。余計なことをするな！」

「！」

弾かれたように振りむくと、鉄格子の外には、レイの姿があつた。レイは、その歳には似合わない険しい表情を浮かべている。

「レイ・・・」

陸がそう呟いた。

「すみれ。今すぐ絢からその本を取り戻すんだ」

レイの声はとても冷たい。

そこには少し前のレイを感じさせるものが、一つもないように感じた。

すみれは、ぎゅっと目を閉じると震えた息を漏らした。そして彼

女は、鉄格子をすり抜けレイの前に立った。

レイはその曇った瞳で、すみれのことを見ている。

「レイ……私にはできない。もちろん、そのことがルールに反する」とは分かっている。罰なら、ちゃんと取けるから安心して「レイはすみれの言葉を聞いても、その険しい表情を崩そうとしない。……いや、むしろ表情をより険しくして、すみれを見た。すみれは、そんなレイを見て、きゅっとその唇を噛みしめる。そして、口を開いた。

「……レイは、絢たちに本通り“罰”を取れるの? レイ、二人とあんなに楽しそうに話してたじやない。それは全部……嘘だつたの……全部偽りだつたの?」

「私だったら、“偽り”で、あんな楽しそうな会話なんてできない」

「ねえ……ほんとの気持ちを教えてよ! レイ!」

すみれが、そう叫んだと同時に鉄格子がぐにゅっと曲がった。

そして、そこに一度、人が通れるくらいのスペースができた。

「……逃げるわ。……絢!」

「はー? ……あつうん!」

陸は鉄格子から飛び出した。

絢も陸の行動に戸惑いながらも、青色の本を胸に抱えたまま陸のあとに続いた。

「! ! !

レイがそれと同時に、絢に素早く手を伸ばす。

「! ! !

(つかまつぢやうつ……)

絢は、もう駄目だ、と思つた。

……しかし、その手は虚しくも絢の体をすり抜けた。

「! ! !

(そつか……)

絢は相手が“守護霊”だということに感謝した。

守護霊には、体がない。・・・そして、体がある自分たちには触れることが出来ないんだ。

レイは絢の体をすり抜けた自分の拳を握りしめると、口を開く。
「俺が決めたことだ。・・・言えるのはそれだけだ」
レイの声は、明らかに動搖してこるように聞こえた。
すみれは、ほとんど間を空けることなく口を開く。

「何か特別な理由があるんじゃないの？」

すみれは、絢と陸の姿が遠ざかるのを確認して、またレイに視線を戻す。

「すみれがそれを知つてどうする？すみれには、一切関係のないことだ」

レイは低い声でそう言つと、その姿をかき消そうとする。
「！」

すみれは、とつさにレイの腕を掴んだ。
・・・このまま、一人のところに行かせるわけにはいかない。
なんとかここで、時間稼ぎをしなくては。
レイは、ギロリとすみれのことを睨みつけた。

「はなせ！－」

「はなさい。・・・レイが本当の理由を教えてくれたら、離してあげる」

「・・・・・」

レイは大きく目を見開き、すみれを見た。

「はい－そこまで－」

「－」

突然、リナが二人の前に姿を現した。そして、二人の手首を掴む

と、それを意図も簡単に引き離す。

そして、ニーツ「口を笑うと言つた。

「すみれちゃん。しつこく訊きすぎるんじゃない？ほんとはどうでもいいんでしょ。あの一人を逃がすことができれば」

「……リナ。どうしてこんなところにいるの！？」リナの担当の人間は、「ここにはいないでしょ！？」

すみれは、リナの思いがけない登場に、焦りの色を必死に隠そうする。しかし、自分の声は全くそのとのとおりにはなってくれない。

リナはそんなすみれの姿を見て、口元に笑みを作る。

「大丈夫、大丈夫。朋歌ちゃんには、代理の子を頼んだら。……そんなことより、“こっちのこと”のほうが、気になつたんだ。だつて、絢ちゃんのことを捕まえようとしたのに、レイがそれを拒んだんだよ？……でも、結局は一人とも、冥界につってきたんだね。レイ」

すみれはレイを見ると、こいつりと笑つた。

「……」

「レイ、速く一人のこと捕まえてきちゃえば？」

レイは、リナのその言葉に彼女を一瞥すると、姿をかき消した。すみれの顔は、それと同時に歪む。

そして、この場に残されたのは、すみれとリナだけになつた。

「……」

すみれは、唇を噛みしめリナを見ているしかできない。

すみれが願うのは、レイに追いつかれる前に、絢と陸が守護霊ルールに新しいルールを書き加えてくれること。

たつたそれだけで、二人は地上に帰ることができるのだ。

リナは、少しの沈黙を置いてから、クスリと笑つた。

「すみれちゃん……。レイが、あの一人に与える罰つて何だか知つてる？」

「……」

リナの声は、今の状況を楽しんでいるようにしか聞こえない。

リナは言葉を続ける。

「私、実は知ってるんだ……。それは、あの二人に人間をやめて
もらひう」と

「!?

すみれの心臓が、早鐘のようになつた。そして、次の瞬間には、
一気に絶望の色に染められる。

まさか・・・レイは、一人のことを・・・。

リナは、すみれの表情とは逆に、ニッコリと可憐らしく笑つた。
「私は嬉しいな。だって、仲間が増えるんだし!」

すみれはその言葉に自分の耳を疑つた。そして、確信してしまつ
た。

「なんでそんなことつ・・・」

絢と陸は、これからも日の当たる地上で生きていくはずだ。それ
以外考えられない。

リナは、すみれから視線を外す。

「ねえ。すみれちゃん? 一人のところに行かなくていいの? せつか
くそのこと教えてあげたのに」

「・・・!」

すみれは、キッとリナのことを見据えた。
(絶対に絶対に・・・そんなことさせない)

そう、どんなてを使ってでも、一人を地上に送りかえす。レイの
思い通りにはさせない。

そしてすみれは、その場から姿を焼き消した。

「さつて・・・どうなるのかな?」

一人この場に残つたりナはそう呟く。

レイの本当に望んでいることをリナは知つてゐる。
すみれの本当に望んでいることをリナは知つてゐる。

そして・・・二人が？同じ想い？を持つてゐることをリナは知つていた。

* * *

絢と陸はひたすら走つていた。
あたりはうす暗く、ひつそりとしている。今聞こえる音は、絢と
陸の必死に走る足音だけ。

(一体、いつになつたら光が見えるの？)

こんな薄暗いところを逃げていても、ただ怖いだけだ。
絢は腕の中にある本を、ぎゅっと抱きしめた。

絶対にこれだけは、手放したくない。この本は、自分たちがもとの世界に帰る唯一の手段なんだからっ・・・！

「絢！そこ止むぞ！」

「！」

見ると、少し行つたところに陸がこちらを向き、立ち止つている姿があつた。そして、彼の横には上へと続く階段がある。

「うん！」

陸は、絢が来るのを待つてから階段を駆け上がる。絢も、陸に続いて階段を駆け上がつた。

「！」

すると、すぐに扉が目に入った。そこにしか進む道はなく、陸はすばやくドアノブに手をかけ、勢いよくそれを開け放つた。

「うつ・・・」

絢は反射的に目を瞑つた。

眩しそぎる光が二人を照らしたからだ。

それでも絢は、何とか前に進み扉を通り抜ける。

「よかつた。ここには牢屋はないぞ」

陸の声に、あたりを見渡すと、ここは今までの部屋とは全く違つていた。白い壁に、広々とした長い廊下。そして、それを照らす明るい照明。

絢が目に入った光景に、見とれていると陸が口を開いた。
「でも、ここに来たからと言つて、安全になつたわけではないんだよなー」

「！・・・陸つ。これに書かないと・・・」

絢は、今まで絢が抱えていた青い本 守護霊ルールが記されている書、を両手に持ちそれを陸に向かつて突き出す。

「だよな！・・・えつと・・・」

「守護霊以外のものは、冥界においてはいけないって書くんだよね・・・！？」

「そう！それだつた」

絢はその書の表紙を、ゆっくりと捲る。

白いページの真ん中には、小さい文字で何かが書かれてあつた。
「守るべき者・守るべき」と

「・・・」

絢はその文字を流すように見ると、次のページを捲る。
そこに書かれてあるのは、目が痛くなるような文字の列。
絢は目を通す気にもなれず、一気にページを捲り、文字書けるほどの余白を探す。

そして、一番最後のページの一一番最後に余白を見つけた。

(よしつ・・・ここに書けそうだ)

「絢。でも、どうやって書くんだ？」

絢は、陸の言葉に彼の顔に目を向ける。

陸は少しばかり眉間にしわをよせ、こくりと見ていた。

「どうやつて……。ペンが何かで書くだよー。」

「書くもの、持っていないけど」

・・・沈黙。

そうだ。書くものがないと……書けないじゃん。
もちろん、絢も書くものは持っていない。

「何でもいいからつ・・・ないの！？」

「ないなー」

陸は即答した。

そして、絢は・・・混乱していた。

このままでは確実に捕まる。

それひとつあの文字を書いてしまえば、この“眞界”とこいつら
からおわいばできるはずだったのに。

「・・・お願ひ。陸。書いて！」

絢はその余白があるページを開いたまま、陸に書を差し出した。

「だから、書くものないって言つてるだろ？？」

「・・・自分の血とかで・・・書いてすねば書けるんじゃないの
？」

「・・・はー？」

陸は信じられないような表情で絢を見る。

それでも絢は必死だった。

「ごめん！陸。ほら・・・ちゅうひとつ、指の先を噛み切つて・・・

書けば大丈夫だよ」

「おーおー。ちょいとつてーそんな痛いことやつたくな・・・

「そんなことしなくてもかけるだ？？」

「！」

聞き覚えのある声が聞こえた。

弾かれたように振り向くと、やけに腕を組みつけたりを見上げて

いる・・・

「・・・・・・」

「レイー！」

絢はレイの姿を見た途端、固まってしまった。

陸はその瞳を歪め、じつとレイのことを見据える。

「逃げても無駄だぞ」

レイは絢のことを見据え、低い声で言ひ。

「・・・・」

「レイ・・・絢のことは見逃してくれないか？罰なら俺だけうければいいことだし」

絢は陸の言葉にはつとして彼の顔を見る。

陸は絢のことは見ようとはせず、ただレイの答えを待っていた。

「それは駄目だ。ルールを破ったのはお前たち二人なんだからな」

「レイ・・・」

「絢！早く書を俺に渡すんだ」

絢はレイの言葉にドキリとする。

（絶対に渡せないつ・・・）

絢はより一層、本を抱く腕に力を込めた。

陸が心配そうに絢を見ているのが分かる。そして彼は、レイに視線を戻すと口を開いた。

「レイ・・・その罰つてなんなんだ？」

レイは陸の言葉に一瞬、不服そうな表情を浮かべる。そして言った。

「聞いてどうする？」

「俺は・・・どんな罰だつて受け入れる自信はある」

陸の言葉にレイの表情が動いた。

「つ・・・何でそんなこと・・・言えるの？」

絢には陸が分からなかつた。

絢は怖くて怖くて仕方ないのに。自分が罰を受けるなんて・・・そんなの絶対に間違つてるつて思うのに。

陸は絢の表情は対照的に、それを少しばかり緩めると口を開いた。

「だって、レイがそんなに厳しい罰を『言えるなんて・・・俺には思えないし』

「・・・・・

陸は当たり前のようになつて言った。

「そうか。陸にとつてレイは・・・“友だち”なんだ。裏切られた
と分かつても“友だち”なんだ。
だから陸は「友だちのレイが、自分に厳しい罰なんて『えらばず
ない』って思えるんだ。
レイは俯き、呟いた。

「本当にそう思うのか？」

「うん」

「・・・その罰は“守護霊になる”ってことなんだぞ？」

「わかった」

「！・・・・・陸！？」

絢は思わずそう叫んだ。

やつぱり陸の考えは自分には理解できない。

「陸！分かつてんの？守護霊になるつてことは・・・もとの世界に

帰れなくて・・・今までの生活もできなくなるんだよ？」

「・・・分かつてるつて」

陸の言葉は以外とあつけなかつた。

「私は嫌だよ！・・・

今までの生活を捨てるなんて自分には絶対にできない。

絢の望むことはただ一つ 元の世界に帰つて、普通の生活を送ることだ。

と、レイが顔をあげた。

「嬉しいぞー！陸！」

「！」

レイは本当に嬉しそうな表情を浮かべ、陸の目の前までふわりと浮きあがる。

一方陸も、表情を和らげレイに微笑みかけた。

（うそ・・・！？何で・・・・）

絢は目の前の光景に愕然とする。こんなに絶望感で一杯なのは、

間違いなく自分だけになってしまった。

「陸……どうして？」

自分の声は、自分でも信じられないくらい弱弱しい。

「レイは俺にとって大切な友だちなんだよ。だから、レイのいる世界で生きていくのも悪くないって思つたんだ……」

「……」

絢は次の言葉を発することができなかつた。

ただ驚いたことは、こんなにも陸はレイのことを大切に思つていたということ。

自分は陸とレイの関係なんて、これっぽっちも分かつていなかつたんだ。

分かつていなかつたことに対しても、否定したくても否定できなかつた。

「絢。俺にその書を渡してくれないか？ 守護霊ルールに“冥界にいる者はすべて守護霊でなくてはいけない”って書き足せば……」

「つ・・・！」

絢はレイの言葉が終わらないうちに、書を腕に抱えたまま走りだした。

自分がどうにかしなければ……本当に自分はもとの世界に帰れなくなってしまう。

陸のことなんてもう頼りにしない。

自分の力だけで……どうにかしてやるんだから……。

陸はただ、絢の遠ざかっていく後姿をじっと見据えていた。

「……」

陸は少し後悔した。

「……自分はたつた一言で、絢を一人にしてしまったのだ。

「陸ー絢を捕まえてくれ」

声の方を見ると、陸の田線の高さまで浮き上がったレイと田が合つた。

「やだ

「なつ！？」

レイは大きく田を見開き、口をへの字に曲げる。

陸はそんなレイの」とは気にすることなく、思つてこる」とを口にした。

「だつて、絢も俺の友だちだし。・・・絢は守護霊になりたくない雰囲気だつたから、捕まえに行くことなんてできねーよ」

「・・・

その後、重々しい空気が一人を包む。

レイの顔には、やはり不服な表情しか浮かんでおらず、陸は、ただレイの次の言葉を待っていた。

「陸、分かっているのか？お前たちはルールを破つたんだぞ？選択肢なんてお前たちにはない」

「そんなの分かってるよ。俺は最初からその覚悟ならできてるし。・・・でも、絢は違う。どうして絢まで眞界につってきたんだ？」

「・・・ルールだからだ」

「・・・

陸は、次に言うべはずの言葉をいつの間にか飲み込んでいた。レイの瞳は微かに揺らいでいた。

・・・・・レイは今、何を思ったのだろう。

「レイ・・・

「陸つ・・・！お前は黙つてろ！」

レイのその声が聞こえた瞬間・・・陸の意識はなくなつた。

「レイ、もつと素直になつたら？」

「...」

レイは陸の体を使って、突然聞こえた声の方に振り返る。

そこにはじめからを見据えていたすみれの姿があった。

「つるさこや」

レイは、陸の声を使って低い声でそう言った。
「生きてる時に、友だちを作ることができなかつたからって……
これぐらいは分かるでしょ？相手のこと思いやれない友情なんて、
すぐになつちゃうんだよ……」

すみれの声はとても寂しげだった。そしてそれを口にする、彼女の表情までもが。

レイはそんなすみれとは対照席に、口をきゅっと結び彼女から顔を反らした。

「俺は友だちができたんだ。守護霊になつてくれると陸は言った。
絹もいるし……俺は、絶対にもう、惨めな思いなんてするつもりはない」

「レイ！ さつき私の言つたこと聞いてた！？ 私は相手のこと思いやれない……」

「だまれ！！！」

レイの大声に、すみれは思わずびくりとする。

レイは大股ですみれに歩み寄ると、また言った。

「分かつてるとか？ すみれ。ルールを破つた奴らに、これ以上手助けするようなまねをしたら……俺がお前を絶対に抜け出せない牢獄にぶちこんでやる……」

レイの瞳は残酷だった。

もうそこに陸の面影はなく、すべてがレイのものに染まっている。

「……」

すみれは、レイの瞳から田線を反らした。

すみれは氣づいてほしかった。

友情なんてとても儂いものだ。ずっとあり続ける保証なんて、どこにもない。

そんなもののために、絹たちが地上を手放すなんて絶対にあってはいけないことだ。

だつてすみれ自身が、“友情”のない世界を望んで一々逃げてきた。

「俺は・・・陸を信じてる」

レイはそう呟き、すみれに背を向けた。

「・・・・・」

すみれにレイを止めることはできなかつた。

だつて自分には・・・「陸を信じるな」とは言えなかつたからだ。

絢は、走ることをやめた。

息が上がりてしまつて、走りたくてもこれ以上走れない。走つても走つても、見えるのはどこまでも続く廊下。窓なんてものはなくて、人工的な白い光が淡々と広い廊下を照らしているだけだ。たまに曲がり角に遭遇しても、その後に続くのは決まってどこまでも続く廊下だつた。

(一体どうなつてんの・・・?)

絢はへなへなとその場に座り込んだ。

この建物はどこかおかしい。まるで、ぐるぐる同じ場所を走つているようだ。

絢は辺りを恐る恐る見渡した。

・・・人・・・いや、守護霊の姿はどこにもない。絢は本を胸の前に抱え、呼吸が整のう待つっていた。

「はあ・・・・はあ・・・・」

辺りは、とても静かだ。物音一つ聞えない。さつきまで陸と会話していたことが、遠いことのように感じられた。

絢の心に渦を巻くのは、恐怖というものに近かつた。

この普通ではない空間で、自分は逃げ続けることができるのだろうか。

“書”は自分が持つてゐるのだから、必ず取り返しにくる守護霊

はこるはずだ。やつ思つと、恐怖が絢の心を支配する。

「つ・・・」

(怖い・・・)

たつた一人。知らない空間。周りは敵だらけ。

(助けてつ・・・。すみれお姉ちゃん・・・)

レイは、陸の体を使って絢のことを探しまわっていた。

ここに建物は特別だ。そう簡単には、出口にたどり着けないだろう。それに、この姿なら絢から書を取り返すことなんて簡単だ。少し陸のまねをするだけで、絶対にレイが陸の中に入っているなんて思いやしない。

「！」

そして、レイは絢を見つけた。

絢は、廊下を曲がったところで、座り込んでいる。

絢の腕の中に、しっかりと書が納められているのをレイは確認した。

「・・・」

レイが絢に近づこうとしたその時・・・レイは、その歩みをぴたりと止めた。

「ひっく・・・ひっぐ・・・」

絢は・・・泣いていた。

・・・とても苦しそうに。

レイは絢に近づくことを二つの間にか躊躇つていた。

(何故・・・泣くんだ？)

レイは他人の流す涙を見たことがなかつた。

そうか。涙と一緒にあらわれるのは表情。すべての感情が表情で

現れる。

「嫌だよつ・・・。帰りたいよつ・・・」

絢は嗚咽の漏れる中、確かにそうひと言つた。

『嫌だよつ・・・。帰りたいよつ・・・』

絢の言葉が“あの時の自分の言葉”と重なる。

ボロボロの病院のベッドで、いつも自分はそうひと言つていた。

「つ・・・」

本当にいいのだろうか。絢と陸が帰る場所を奪つてしまつて。自

分は本当にそれで満足なのだろうか。

『相手のことを思えない友情なんてすぐに終わっちゃうんだよ・・・

すみれの言葉がレイのあたまの中で響いた。

レイは陸のことを信じている。陸は絶対に自分との友情を終わりにしないと信じている。

でも・・・。

「陸・・・」

「！」

声のほつを見ると、絢が涙で頬を濡らしたままこすりを見ている姿があつた。

絢は立ち上がると、こちらに歩み寄り言つた。

「陸つ・・・。お願ひだから、守護霊なんかにならないで!一緒にもとの世界に帰ろうよつ・・・」

絢の表情は必死だ。

「絢・・・俺は・・・」

レイは信じられなかつた。・・・自分が。

こんなんじや、満足いかない。

陸が永遠の友情を誓つてくれたとしても、自分にそれができない。レイは改めてそのことに気づいてしまつた。

陸と絢の大切なものを奪つたと知りながら、自分と彼らの永遠の友情が続くとは・・・思えなかつた。

「絢。実は俺、その本に文字を書く方法知つてるんだ」

「陸は突然、そう言った。

「えっ・・・ほんとに！？」

絢は陸の信じられない言葉に、思わず彼を凝視する。

陸はいつものように口に笑みを浮かべ、頷いた。

陸がここに来てくれただけでも嬉しかったのに、まさかこんない

いここまで知つていたなんて。

「どうやるの！？」

絢が即座に質問すると、陸は絢に手を差し出し「かして」と言つた。

絢は素直に、手に持つていた本を陸に手渡す。

陸は、絢から本を受け取るとその表紙をゆっくりと開いた。そして、一番最初のページにそつと人差し指を乗せる。

「・・・？」

しかし、そこで陸の動きがとまった。

絢は不思議に思い、陸の顔を見る。

「！」

そこには、陸には似合わない表情があつた。

彼は唇を強く噛みしめ、その瞳は微かに歪んでいる。

「陸？どうしたの・・・？」

「・・・何でもない」

陸は呟くようにそれだけ言つた。そして、陸は書の上に置かれた人差し指を、紙面をなぞるようにゆっくりと動かす。

すると、そこから淡い光が漏れ始めた。指でなぞった後には、光の線が浮き上がりそれらは次々と紙面に文字をえがいていく。

そして・・・陸は文字を書き終えた。

“守護霊以外のものは、冥界にいてはいけない”

「・・・」

それらの文字は、一瞬より白く輝いたかと思つと、ゆっくりと紙

面に吸い込まれるようにして消えていった。

「やつた！」

すると突然、陸が手に持つてゐる本を床に叩きつけた。

「！？」

突然の陸の行動と、その大きな音に絢の心臓がはねる。そして、陸は勢いよく絢に抱きついてきた。

「え！？ 陸じうしたのっ・・・？」

絢は陸の思いがけない行動に、驚きを隠せない。

「陸つ・・・絢・・・行かないでくれ・・・。ずっと俺と一緒にいてくれよ・・・。」

「・・・？」

（もしかして・・・泣いてる・・・？）

絢の心臓は早鐘のようになつていた。

陸のこんな姿を目にしたのは、今までに一度もなかつた。

（あれ・・・でも・・・）

絢は陸の言葉を聞いて気づいてしまった。

さつきの陸の言葉は、間違いなく陸の言葉ではなかつた。

「・・・レイなの？」

絢は自分に強く抱きついたままの陸・・・いや、レイに恋の恋るそう言つた。

「！」

と、絢の目の前の景色がぐにゃりと歪んだ。そして、足元が立つていられないほどに不安定になる・・・。

「つ・・・」

絢は立つてゐることが困難になり、そのまま床に倒れた。

「・・・・・・！」

次に絢を待つてゐたのは、見慣れた景色だった。

絢は体を起こすと、辺りをぐるりと見渡す。

コンクリートで固めた道。永遠と続く夜空。そして、玄関から漏れる明かり。

絢は、陸の家の前の道にいたのだ。

「帰つて……これたんだ」

絢は自分の手首に視線をおとす。

そこには、“手錠の痕”はなく、こつもんめの自分の手首があつた。

（よかつた・・・）

元の世界に帰つてこれた。もつ、あんな怖い思いはしなくて済むんだ。

「！」

次に絢の目に映つたのは、絢のすぐ後ろに倒れている陸の姿だつた。陸は意識がなく、ぐつたりとしている。

「陸！」

絢は陸の体を激しく揺さぶつた。

すると陸は、ゆっくりとその瞳を開く。

「絢つ・・・！」

陸は目を大きく見開きながら、勢い良く立ち上がりあたりをキョロキョロ見渡した。

「ここ・・・」

絢の耳に、陸がそう呟くのが届いたので、絢は言った。

「もとの世界に帰つてこれたんだよ」

絢もゆっくりと立ち上がり、そして陸に自分の手首を見せた。

「ほら、手首にあつた手錠の痕も消えてるし・・・」

「・・・」

陸は、はつとして絢の手首を見る。そして、その表情を和らげ言つた。

「そつか~。よかつた、よかつた」

「うん！よかつた・・・」

すると、陸は辺りをまたキョロキョロと見渡した。

「おーいー・レイー！でてこよー」

「・・・・・」

絢は、陸の発した言葉にドキリとした。

“もうレイには会えない”絢は密かにそう感じていた。だって、また会えるのならレイはあんな言葉を口にするわけないし、ましてや涙なんて流さないと想い。

しかし、絢はそう口にするとはできず、ただ陸が、レイを探すのを見守るしかなかつた。

「レイーーー！」

「・・・・・」

絢はそんな陸の姿から自然と目を反らしてこた。

（陸・・・・・レイとはもう・・・・）

「会えないんだよ・・・・・」

絢はこの光景を見ているのが辛すぎで、思わずやつててしまつた。

陸は絢のほうに振り向いた。

「・・・・なんで絢にそんなことが分かるんだ？」

陸の声には、怒りが入り混じつていて、どう聞こえた。

絢は初めての陸の様子に戸惑いながらも、口を開く。

「レイが・・・泣いてたから」

陸は絢の言葉を聞いて、どう思ったのだろう。

絢には陸がやつぱり分からなかつた。ただ陸は、哀しそうに微笑んで、「そうか」と言つただけだつた。

陸はすべてを受け入れたのだろうか。それとも、今でも陸は「レイとまた会える」と信じて疑つていないのだろうか。

でも、分かつていてこと一つだけある。それは・・・・・

レイはこつものよつて、陸のいる教室の窓のせんに腰を下ろして

* * *

いた。

陸もいつものように、授業中にも関わらず爆睡しているし、絢もいつものように黒板に書かれた文字を必死にノートに書き写している。

「レイ。退屈なんじやない?」

「…」

声のほうに向かって、絢の後ろにはすみれが立っていた。

「すみれもやうだろ?」

「あはは。そうだね」

すみれは微笑むと、絢、そして陸のほうに視線をうつした。

「いいの? 陸にちゃんとお別れ言ってなかつたけど…・・・

「いいんだよ」

「・・・本当は面と向かつてお別れいつの、照れくさかったんじやない?」

すみれは、口に笑みを浮かべレイを見る。

レイはふんと鼻を鳴らし、明後日のほうを向いた。

レイは少しだけ安心していた。

陸たちの大切なものを奪わなくて済んだから。そして、永遠の友情を手に入ることができたから。

それにいいんだ。

こうして陸と絢と一緒にいることができる。たとえ姿は見えなくても・・・・繋がっているのだから。

end .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7556p/>

守護霊ルール

2010年12月27日17時40分発行